

中国語の言葉表現における「軽声」発音の規則に関する研究

薄 宏

要 旨

本来の声調を失い、軽く短く発音される音節のことは「軽声」と呼ばれる。中国語の「軽声」は、言葉表現において重要であり、正しい表現が基盤となる。だが、日本語を母語とする話者の多くにおいて、中国語学習の初級段階では「軽声」に関する分かりやすい教示量が絶対的に少ない。そのため、「軽声」なりの発音の特徴や規則等を十分に把握せず、上級レベルへと学習を進めてゆくこととなる。学習レベルは向上してゆくのに、言語表現に欠かせない「軽声」の発音には自信を持たずに進まなければいけない状況があるのである。

本研究は、中国語の「軽声」の指導方法について、様々な問題が発生しやすい現状を統計的に段階的に分析し、その要点をまとめるものである。

「軽声」の特性に沿う発音の提示方法・指導方法・注意点等について、中国語学習の初期段階で、「軽声」の重要性を四声と同等と提示したり、注釈を示したり、ある意味（第）五声と位置付けて論を展開したりすることにより、現代中国語言語表現における「軽声」の重要性を常に意識づけうる。それにより、日本語母語話者へ包括的かつ終始一貫した教育を効果的に実践し、正しい発音と最適な表現、正確な表現へと導くことが可能となるであろう。「軽声」は、文字には表しきれないながらも、現代中国語表現に独特かつ必須で非常にデリケートな表現であることを、ここで重ねて強調したい。

「軽声」の、日本語母語学習者における認知度、存在感や重要性等は、初級段階から徐々に学ぶことで、四声と同様に習得し、認識することができる。指導を決して急がず、応用の仕方や表現の適用方法、タイミング等には決まりがなく不規則などと見なすことなく教示することで、日本語を母国語とする学習者も「軽声」の存在を正しく理解し、習得し、そして適切に表現に用いることができるよう自然に習得できるだろう。そこで、現代中国語言語表現における「軽声」指導の過程において、日本語母語学習者が中国語の「軽声」の正確な規則や用い方を徐々に習得し、基本から無理なく十全かつ正しく使用するためにその特徴を要約することが、本研究の目的である。

キーワード：中国語、声調、四声、軽声、発音

第一章

現代中国語の軽声の存在を日本語が母語の学習者に指導するにあたっては、これまでの研究では特に決まりが見当たらない。

1、第一段階は、「軽声」が現代中国語の言語表現に欠かせないものとしての認識である。「軽声」のもっとも重要な要素は：

- (1) 短（ショート） (2) 軽（ライト） であること。

「軽声」であることの決定的な決め手は、(1) 短いことである。ただし、何処まで短いか、そしてどの程度短いかは、とくに決まりがないものの、一つの基準として、「軽声」発音の長さは、四声の発音の半分（実際運用する際には、諸条件のもと、半分より長めになる場合や短めになる場合もある）が目安となる。この目安により安易に現代中国語の言語表現の中、特有とするリズムで成り立つ「軽声」を認識するに良い都合である。そもそも中国語の文語表現には「軽声」はないに等しい。「軽声」の存在は、通常の日常生活での分かりやすい口語表現に特有な、人間同士の情感、情緒、人情、心情諸々を直感的に伝えるために、長年の変化と淘汰により形作られたものである。

さらに、日本語母語話者へ具体的に「軽声」の発音の長さと言程の高さの要領を提示するとした場合、次の4種類の発音に分けられる。

- 第一声＋軽声（音域全体の間中部で短く発音）
- 第二声＋軽声（音域全体の間中部で短く発音）
- 第三声＋軽声（音域全体の間中部で短く発音）
- 第四声＋軽声（音域全体の底部で短く発音）

このようにまとめると、「軽声」の発音の要領は、次の2通りであることが分かる。

2、日本語母語話者には先ず十分に「軽声」の固有かつ独特な存在意義の認知と把握を促すこと。

「軽声」をよく代表するのは、常に「軽声」で表現する語気助詞“呢”などであること。

“呢”の由来については、先行研究の薄宏（2014）の中で具体的に述べている。その主旨は、NE1、NE2という二つの相違が存在する起源に始まり、長い年月の中、時代や社会における人間同士の日常生活における言語表現の変貌によって、緩やかに今日の現代中国語の中の語気助詞“呢”と疑問助詞“呢”になったというものである。性質がまったく異なる二つだが、発音は全く同じの助詞である。

また、孫錫信（1992）は、かつて中国語の疑問文に出現する NE1 は、中国従来の“爾一聾一你一尼一呢”から変化しつつ形成されたものであると論じた。さらに、平述文に出現する NE2 については、“裏/里一哩一呢”というルートで変化しつつ形成されたもので、NE1 とは異なる、と論じている。実際のところ、両者は語気助詞“那”とは異なる起源を持つが、NE1 と NE2 の統一上においては、間接的に補助の役割を果たしている。ほか別論として、江藍生（1986）は、両者の起源はともに同じく“爾”という文字であるとする。いわゆる NE1 は“爾一聾、你、尼一那/呢”という変化によるもの、NE2 は“里/裏一那

「哩—呢」と変化したものという。また、現在も変化の途上である“那”は、“嚮”、“你”を経てのもので、“哩”は一つの新しい語気助詞として誕生し、平述文にのみ現われる。ただし、時間の流れや時代の変遷を経て変貌する中、平述文にしか現れない呢は、文中にある疑問助詞“呢”にも通ずるようになり、両者はどちらにも現れるようになった。

元朝、明朝、清朝の三つの時代では、首都は北方の燕京（今の北京）に定められ、北京語は官語と見なされ、“呢”と“哩”は「合体」し、ともに“呢”に統一された。

一方、馮春田（2000）は、諸先行研究を総合的に分析し、“呢”の由来は指示代名詞“爾”であるとし、さらに“爾”が“嚮”へと変化しながら、非疑問文に適用された具体例を複数挙げて、指示の意より肯定の意に転換した文型を示した。これらの先行研究から言えるのは、今日の語気助詞“呢”と疑問助詞“呢”は、言語表現のみにとどまらず、文章表現においても極めて重要な助詞であるということである。したがって本稿では、現代中国語の言語表現の可能性をも含めて発音パターンを総覧して軽声の発音を分類し、さらに軽声の発音の特徴を総括することを研究目的とする所存である。

周知の通り、語気助詞の“呢”も、そして疑問助詞の“呢”も、特殊な表現以外には、いずれも軽声で語気句文型と疑問句文型の表現形式で表される。

例1：語気句文型中の語気表現としての語気助詞“呢”

(1) 語気句文型のみ：

- ① 我们还没吃饭呢。
(私たちはまだご飯を食べていないよ。)
- ② 他们还没有去呢。
(彼らはまだ行っていないよ。)

(2) 語気句文型、現在進行形と現在持続形の三重表現の場合は、

- ① 我们在酒店（正在）吃饭呢。
(私たちはレストランで食事（をしている）よ。)
- ② 我们在酒店吃（着）饭呢。

(私たちはレストランで食事（中）だよ。)

例2：疑問句文型においては疑問を表わす疑問助詞“呢”

(1) 疑問助詞疑問句の場合：

- ① 你什么时候打算来日本呢？
(君はどんな時日本に来る予定ですか。)
- ② 你什么时候不打算来日本呢？
(君はどんな時日本に来ない予定ですか。)

(2) 反復疑問句：

- ① 你是不是打算来日本呢？
(君は日本に来る予定があるでしょうか。)
- ② 你是打算来日本不是呢？

(君は日本に来る予定があるでしょうか。)

(3) 選択疑問句：

① 是打算来日本，还是不打算来日本呢？

(日本に来る予定ですか、それとも日本に来ない予定ですか。)

② 是打算来日本，还是打算去台湾呢？

(日本に来る予定ですか、それとも台湾に行く予定ですか。)

例3：軽声を用いる本来の目的は次のとおりである。

(1) 表現をより円滑かつスムーズにするため

(2) 表現中の疑問句文型、語気句文型、現在進行形および現状についての正確な表現のため

上記の例1、2、3により軽声が本来持つべき最も重要な発音の特徴は次の3点であるがわかる。

(1) 音の強弱 (2) 音の高低 (3) 音の長短

これら3つの論点は、音声学の観点から軽声の発音についてまとめたものである。発音においては、音量（音の三要素である：音の強さ、音の高さ、音の長さ）の認知活動が随時行われている。そして発音は、四声、軽声、重声、強調声、感情による情緒性をも含めた各種要素が融合したものであり、特に四声と強調声は音の高さと密接な関連性を持つ。重声は音の強調声の範囲に左右される。

言い換えれば、軽声は、表現の中で随所に円滑に結ぶ役割を良く果たし、表現において重要かつ欠かせない存在である。したがって、軽声の発音の変化は、必要に応じてあってしかるべきものである。この軽声の発音の変化は、軽声として許容される範囲の中での変化である。つまり、四声、重声、強調声、感情による情緒性をも含む融合的な活用であり、軽声として許容される範囲内での発音変化に過ぎないのである。

第二章

1、軽声に関して、中国語表現における関連性の分類は欠かせない。

(1) 疑問助詞：吗；呢；啊；呀；呗；喽；嘛；……。

例：有吗？有呢？有啊？有呀？有呗？有喽？有嘛？

(2) 文末助詞：的；了；……。

例：有的。有了。

(3) 名詞となる接尾辞：子；头；们；边；么；家；……。

例：种子；椅子。 苦头；拳头。 他们；人们。

外边；里边。 这么；怎么。 亲家；娘家。

(4) 動詞の後ろにつく接尾辞：

① 了：来了；拿了；叫了。

② 过：看过；去过；练过。

③着；开着；流着；接着。

(5) 構造助詞：

①的：似的；有的；要的。

②得：〈1〉程度補語として、学得好；来得巧；睡得香。

〈2〉可能補語として、听得清；看得明；谈得来。

〈3〉動詞の後に動作や行動が可能か否かの表現をになう。

使（不）得；免（不）得；舍（不）得。

③地：辛劳地干；努力地学；高兴地说；老实地过。

(6) 方位詞：

①上：桌上；天上；网上。

②里：手里；水里；村里。

③外：内外；郊外；海外。

(7) 方向補語：

①来：回来；买来；过来。

②开：打开；开开；分开。

③下：走下；眼下；滑下。

(8) 動詞の重複型：

①一字重複：看看；点点；说说；聊聊。

②二字重複：结结巴巴；躲躲闪闪；遮遮掩掩。

③一語句重複：研究研究；休息休息。溜达溜达。

(9) 動詞でない重複型：

①一字重複：姥姥；叔叔；弟弟；本本（儿）。

②二字重複：口口声声；婆婆妈妈；神神道道；

坑坑洼洼；稀稀拉拉；嘻嘻哈哈。

(10) 量詞：

①个：三个；那个；每个；有个；哪个。

②本：三本；那本；每本；有本；哪本。

③把：三把；那把；每把；有把；哪把。

(11) 文法により派生した軽声の場合は、強調（精確な四声を発音）の表現以外は、すべて軽声での発音によって表現する。

例：马虎归马虎，糊涂属糊涂。不得已去了一趟。

2、諸々の原因による軽声の発生については、次の通りである。

(1) 語句が組み合わさった時に、名詞の重複が生じることによって双音節となつて軽声の発音が発生したもので、二文字目は軽声で発音しても語意の元の意味に影響が生じないもの。

例：一字の名詞重複：妈妈；爷爷；叔叔；妹妹；舅舅。

(2) 語句が組み合わさった時に、動詞の重複が生じることによって双音節となり、語句による軽声の発音が発生したもので、二文字目は軽声で発音しても語句の元の意味に影響が生じないもの。さらに動詞を軽量化する効果を発揮するもの。

例：一字の動詞重複：试试；看看；说说；坐坐；玩玩。

3、語句が組み合わさった時に、名詞が特定の、常用的、そして単一の意味のみを持ち表現の際にもその単一性が変わらずに表われるもの。ただし、ある特殊な条件のもとにより、文法に由来して軽声の発音現象が認められる場合である。

例：特殊な語句：喜欢；月亮；舒服；马虎；石榴；稀罕；耳朵；哪里。

4、一般的に、第三声の文字を軽声で発音する時に、ある特定の状況において特殊な軽声発音が不可欠な場合がある。その語句が組み合わさることで固有の言葉となるものである。同じ文字の重複による発音の特徴は、二文字目の発音が軽声であることは共通に認識されているが、次の語句は、全く特殊な発音となる。

(1) 第三声が完全に失われるもの。

例：奶奶；嫂嫂；姥姥；宝宝；婶婶。

右記のように、語句が組み合わさった時は、慣例的な第三声（半三声）の変化に沿わないことが要注意で重要である。本来の第三声+第三声時の発音は、第二声+軽声であるが、この場合、発音は次の通りとなる。

第三声（半三声）+ 軽声

(2) 第三声が完全に失われず、半三声で発音するもの。

例：哪里；理想；想法；了解。

右記のように、同じ文字でない語句が組み合わさる場合、それぞれの文字がなう語意は、この発音で表すことが唯一の表現手段であり、正確に発音することにより、その語意をはじめて伝達できる。

その発音は通常の発音と比較すると一目瞭然である。第三声+第三声の発音は一般的に、

①第二声+軽声

であるが、実際にその語意を表現する発音は次のとおりである。

②第二声+第三声（半三声）

第三章

さまざまな軽声をさらに詳細に分類することによって、その特徴、普遍性等を多角的に把握できる。

1、「半声調」の発音によって派生した軽声の発音のもの。

前述のとおり、軽声の一般的な発音の特徴は、二文字目が軽声になるというものであるが、次の三種類のものは、一字目にすでに“軽声化”するものがある。

- (1) “一”を頭文字とする語句：一同；一起；一般；一本；一年。
- (2) “不”を頭文字とする語句：不来；不去；不好；不买；不找。
- (3) 第三声2文字が組み合わさった語句：理解；表演；敢闯；小鸟；老马。

右記(1)(2)の表現は、語意の単一性が高い語句については、特別に強調しないならば通常の声調どおりに発音しなくても良い。さらに、その発音を実施しても語意に差し障りのないものは、「半声調」で発音することによりその表現が完成する。

先述の(3)については、2文字とも語意を表わすにあたり大事な意味を持つ文字が用いられているが、語句としての使用頻度が高く、しかも汎用的なため、その発音を実施する時に「半声調」であっても、理解に支障は生じないため、そのままの発音で表現することとなる。

2、一般的な語句発音の約束として、重複が二重の場合の二文字目の軽声は、例外的に組み合わさった語句の必要性に応じて、二文字目の声調通りに発音して表現する。

例：清清楚楚；干干净净；痛痛快快；多多少少；轰轰烈烈；说说笑笑。

3、一般的な語句発音の約束として、重複が二重の場合の二語目の二文字目は、軽声で表現すべきものながら、動詞の語意を軽減するために二重動詞が組み合わさった表現であることから、その二文字目は軽声で発音する。

例：打听打听；收拾收拾；商量商量；准备准备；考虑考虑；安排安排。

4、3音節の語句は、2音節の語句と異なり、3つの語意を表現するものとなり、軽声の発音はそれぞれの特徴による。

- (1) 3音節の2文字目の発音が軽声の場合：
对不起；走着去；多少钱；来得及；传得开。
- (2) 3音節の3文字目の発音が軽声の場合：
不客气；没关系；想办法；有主意；小作坊。
- (3) 3音節の2、3文字目の発音が軽声の場合：
拿回来；走过去；跑上去；看起来；捡起来。

5、必要に応じて母音の発音を軽声化することにより、表現を円滑にするもの。

- 例：(1) aはeに： 爸爸； 结巴； 打发。
- (2) anはenに： 麻烦； 喜欢； 志愿。
- (3) angはengに： 大方； 稳当； 和尚。
- (4) aiはeiに： 明白； 出来； 秀才。
- (5) aoはouに： 热闹； 唠叨； 多少。
- (6) iaはieに： 指甲； 李家； 庄稼。
- (7) uaはuoに： 笑话； 计划； 黄瓜。
- (8) üはiに： 回去； 过去； 拿去。

右に述べた例は、その語句が組み合わさった関連性に応じて、母音の発音が変化したものである。個々の語句を個別に分析することで、はじめて正しい発音を適用できること

は、特に注意したい点でもある。

6、母音の発音を、必要に応じて変化させず轻声で表現し、表現を円滑にするもの。

例：(1) a :	造化；	芝麻；	勾搭。
(2) ai :	安排；	砚台；	搪塞。
(3) an :	打算；	齐全；	教练。
(4) ang :	较量；	荒唐；	便当。
(5) ao :	计较；	核桃；	公道。
(6) o :	老婆；	把握；	摸索。
(7) ou :	朋友；	问候；	念头。
(8) e :	这么；	资格；	哥哥。
(9) ei :	机会；	妹妹；	薪水。
(10) en :	精神；	工人；	我们。
(11) eng :	批评；	收成；	奉承。
(12) i :	便宜；	玉米；	伙计。
(13) ie :	巴结；	礼节；	区别。
(14) u :	义务；	埋伏；	包袱。
(15) ü :	秩序；	委屈；	抬举。

先述した6と比較して、母音の発音が変わらないことに起因する。その特徴を十分に分析し、相対的に把握することにより、正しい発音で正確に表現することがもう一つの特に注意すべき点と言えよう。

7、母音の発音を変化させず轻声で表現し、表現を円滑にするもの。

例：(1) zh :	组织；	固执；	价值。
(2) ch :	维持；	羞耻；	口齿。
(3) sh :	过失；	收拾；	差使。
(4) z :	孩子；	金子；	椅子。
(5) c :	推辞；	下次；	潦草。
(6) s :	官司；	心思；	上司。

語句が組み合わせるにあたって、表現の省略は常に生じるものである。その中で新たな轻声が“誕生”する可能性について、ここで母音の発音が変わらないことで、轻声の発音が確定すると認識できることを提示したい。

8、問題と成りうる3点について述べたい。轻声の発音は無用である。

- (1) 固有名詞：巴西；尼泊尔；东南西北；出尔反尔。
固有名詞においては轻声は存在しない。
- (2) 人名：清水安三；櫻美林华子；金田一郎。
人名においては轻声は存在しない。
- (3) 常用語彙：原子；娘子；身旁；旁边；完了。

9、次の語句は、その語意を二文字とも発音が確定したことにより、はじめて正確に発音することができるものである。

例：人家；大意；地道；地方；东西；千金；买卖；老子；结实。

10、さらに、たとえ同じく軽声となるはずの語句でも、習慣化した語法のため、語意によって軽声の発音が異なってくる。慣例的な発音である第三声+第三声は無論のこと、第二声+軽声の発音構成は、次の例で挙げた語句の場合、通常の慣例どおりではなく、特殊な発音構成：第三声（半三声）+軽声となる。

例：(1) 一字重複：奶奶；姥姥；婶婶；宝宝。

(2) 二字語句：老子；马虎；耳朵；小子。

現代中国語の発音において、基本となるのは四声+軽声である、言わば5種類の発音で構成される。この5種類の発音は、言語表現においては、欠かすことのできない発音要素でもある。さらに軽声に関する共通認識として、軽声の存在は、四声、重声と並んで、最適な言葉の使用と語意の伝達に力を発揮するものであり、その存在は現代中国語の言語表現に欠かせないものである。

今後の研究としては、軽声をより一層深く理解できるよう、軽声の形成をさらに分かりやすくまとめることを進めたい。軽声をまとめて規則性を探り出し、分析し総括することにより、最適な応用方法をまとめられるよう、研究を推進していく所存である。

〈中国語主要参考文献〉

馮春田 (2000) 『近代漢語語法研究』, 山東教育出版社。

江藍生 (1986) 疑問语气词 [呢] 的来源, [语文研究] 1986 第二期。

刘月华・潘文娛・故韡 (1983) 《实用现代汉语语法》, 商务印书馆。

陸俭明 (1984) 关于现代汉语里的疑问语气词, 《中国语文》第5期。

邵敬敏 (1989) 语气词 [呢] 在疑問句中的作用, 《中国语文》第3期。

史金生 (2000) 语气词在 [呢] 疑問句中的功能, 《面临新世界挑战的现代汉语语法研究》, 山东教育出版社。

孙锡信 (1992) 语气词 [呢] [哩] 考源补述, 《湖北大学学报》, 第六期。

〈日本語主要参考文献〉

周艶紅 (2008) 「中国語の語気助詞「呢 (NE)」の本質的な意味」『中国語教育』第6号。

薄 宏 (2014) 「現代中国語における「疑問助詞」としての「呢？」の本質的な意味の考察」桜美林論考『言語文化研究』第6号。